



再びは揚がらぬ幕や星月夜
 ことづけのごとくさくらの返り花
 新しき詩集のごとく白鳥来
 相撲甚句かけて津軽の大根引
 人力の廻り舞台や霜の夜
 牛突きのかつんこつんと秋渴
 斧を噛む冬木の痛み掌に残る
 神棚に熊胆を置き雪の村
 遠嶺に深き黙ある冬至かな
 むらぎもの心急くけふ枯野駆く
 真剣を銜みて攻むる神楽舞
 一生は切火のごとし冬落暉
 白浜のすつぱり播粉木隠しかな
 癌の粒天与の露と妻が言ふ
 平和とは大白鳥の舞ひそむる

*

国見敏子
 奥山源丘
 岩井かりん
 有手 勉
 後藤行雄
 川村五子
 青木山彦
 吉澤 清
 丸山公子
 水野星闇
 竹岡みち子
 竹野入美奈子
 三浦土火
 倉科繁登
 永島理江子

冬至の日若き庭師の早仕舞
 桃色のチューリップ置くピアフの墓
 化けの皮一枚分を着膨るる
 人間も冬眠せよとロシアの熊
 跳ね回る至福の馬や今年菓
 金木犀猫が月から降りて来る
 ふり返り椅子に妻なき暮雪かな
 天井の鼠も走るクリスマス
 星々のひかり打ち合ふ霜夜かな
 落花生ぼつちおとぎの国めきぬ
 冬の川 轟 橋を過ぎてより
 開戦日琉球人は武器を持たぬ民

*

日は西に漉舟に日の届きたる
 黄落や浅間の裾廻海のやう
 深く沈みゆく極月のレクイエム

上石哲男
 宮城昭代
 松井 弓

水谷亮一
 金子圭子
 岩上諒磨
 栗原利代子
 雄長万寿美
 廣瀬西山
 許勢元貞
 松澤勝彦
 遠藤靖子
 中村博子
 長尾裕美子
 渡嘉敷皓駄

——同人集・岳集・青雲集から

巻頭のことば 創刊四十五周年を迎える年頭の新年総会・俳句会が滞りなく済みほっとしている。次々に現れるコロナの変異株との闘いであり、ときに共存とは気が抜けない。大局では一寸先は闇であろうが、とりあえず五月の四十五周年行事が終了するまではこれ以上異変がなく平穩へ向うことを地貌の祖霊に祈っている。皆さんも居住地の地霊によるしく。

再びは揚がらぬ幕とは一生きるとは一回の勝負

再びは揚がらぬ幕や星月夜 国見 敏子

満天の星を仰いで感慨である。作者八十五歳。己に厳しく、ときに直言が胸を打つ。お世辞はいわない。真実を突く。もう二度と華やかな舞台の幕は揚がらない。とはいいいながら、かすかに揚がる予感を漂わせるところが、人を惹きつける小諸のリーダー、苦勞人である。

ことづけのことくさくらの返り花 奥山 源丘

そこに確かにさくらの返り花が咲いていたのである。予感が当たったように。こんなひたと期待通りとは、今が最高かなとふと感じたのであろう。歳をとるとはこのように今を意識する。さくらの返り花への着目に華がある作者である。

新しき詩集のことく白鳥来 岩井かりん

中国文人の境地を極めんとされる書道の大人、大淳先生の雪国の風土詠に驚いた。暮しの拠り所の指摘が鋭い。

遠嶺に深き黙ある冬至かな 丸山 公子

句の骨格が見事に決まっている。遠嶺は多分雪に覆われた雪嶺。しんしんと寡黙に見える。一年の深いクレバス冬至。明日からまた饒舌な日が始まる。作者の代表作になるう。

むらぎもの心急くけふ枯野駆く 水野 星間

体内の臓物(むらぎも)の疼きを感じながら、枯野を駆ける。電話とかメールとか、文明の利器を安易に用いることに抵抗があるのではないか。「むらぎもの心急く」は入り組んだいい方であるが、底力を感じる。

真剣を銜みて攻むる神楽舞 竹岡みち子

神楽舞は冬の夜の神事。天皇が賢所に出御して、舞人が真剣を手に天皇家の日本の開闢神話を奏上する。剣や弓などを

今月の秀句

牛突きのかつんこつんと秋渴 川村 五子

隠岐の島、牛突き囁目吟。昨年十月末、隠岐へ行った。合同句会での高得点句であり、時間を置いても巧さは光っている。「秋渴」が巧み。牛突きの真剣勝負が醸す空腹感を鮮やかに実体化している。お腹が空いたという実感がある。「かつんこつん」の擬音が孤島の秋を深く感じさせるのである。

鮮やかな句だ。詩集は見飽きたと思いつながら、次々に新天地を彷彿とさせる感動の贈り物が届けられるものだ。毎冬の白鳥も同じ。感動を受け入れるだけの柔軟なスペースを心に用意しておきたい。じつくりと意欲的な作者である。

相撲甚句かけて津軽の大根引 有手 勉

広い大根畑が目浮かぶ。ここは津軽平野。のんびりしながら元気が出る相撲甚句でもかけないと仕事は捗らない。林檎採りでは平凡、大根引が面白い。土俗探求の作者である。

人力の廻り舞台や霜の夜 後藤 行雄

古いところで、さしずめ明治の新派の場面を思い浮かべる。舞台は、お薦めの仲を裂かれる「真砂町の先生」(湯島の白梅)を訪ねる主税の場面など。新しい句材を大胆にぐいと描く作者の心中には、時に、こんな古風さが懐かしさがあるのであろう。「霜の夜」とは新旧混雑な思いを掻き立てる魔力がある。そんなことに気付かされた。私にもこの傾向がある。

斧を噛む冬木の痛み掌に残る 青木 山彦

切る斧ではなく、切り倒される冬木の「痛み」を身を感じたアニメイズム風な感じ方に注目した。

神棚に熊胆を置き雪の村 吉澤 清

「採物」といい「採物」が神楽の傍題季語である。民間には霜月祭など冬祭の里神楽がある。真剣に注目したのが珍しい。

一生は切火のことし冬落暉 竹野入美奈子

「悼一志貴美子」と前書がある。火打石を打ち合せて切る一瞬の切火。貴美子さんの死を信じがたい思いからこの比喻を用い、悼句にした。冬の夕日に遣りきれなさが滲む。

白浜のすつぽり播粉木隠しかな 三浦 土火

珍しい山陰から北陸の地貌季語「播粉木隠し」。旧十一月の大師講の日の雪をいう。とろろ汁でも掛けた感じが面白い。

癌の粒天与の露と妻が言ふ 倉科 繁登

妻がさらりといった。それまでの内心には反芻の苦しみがどれほどか。なにもその片鱗も見せないでいう「天与の露」(天が齎した露草の露くらい)とは悟りの境地か。

平和とは大白鳥の舞ひそむる 永島理江子

大白鳥の拡げた羽の大きな純白さは平和のシンボル。常に戦場の残酷無惨な光景が意識から離れない世の人々は今か今かと白鳥が舞う時を待っている。卒寿を越える作者の強靱さに感心する。

雪嶺集・前山集から推薦候補作をあげる。

- 山の神講跳ねし鯉から生け捕りに 田中 純子
- 星が星弾くみづうみ聖菓切る 田中 優子
- 善光寺鉦鼓を叩き煤払 小林 邦子
- 空谷を石の転がる十二月 児玉 君子

若き庭師の早仕舞―冬至の哀愁

冬至の日若き庭師の早仕舞 水谷 亮一

冬至は一年で一番昼の時間が短い日は周知である。二〇二二年十二月二十二日冬至日(国立天文台情報)の東京では日の出六時四七分、日没一六時三二分、昼時間九時四五分。同地の夏至は日の出四時二四分、日没一九時。昼時間一四時間三五分。昼時間に五時間近い差があるとは驚きだ。

若き庭師から、自然の時間に逆らわれない素朴さを私は想像する。明日動くには睡眠時間も取らなければならぬ。家族が居れば子供をお風呂に入れるだろう。飛躍したい方をすると、冬至は人生の儂さをそれとなく感じさせる日ではないか。

桃色のチューリップ置くピアフの墓 金子 圭子

二十世紀を代表するフランスのシャンソン歌手。パリの下町路上に生まれ、波乱に富んだ四十七歳のもみくちの生涯

今月の秀句

化けの皮一枚分を着膨るる 岩上 諒磨

私の着膨れとは化けの皮の分量だとは巧い着眼である。いわれてみれば誰も化けの皮という矜持を着込んで生きている。剥がれないように、剥がれるか剥がれないかの紙一重の虚実の間で暮らしている。演劇人などはそれを飯の種にする。意識しながらドラマ仕立てにするのが商売であろう。名句と思う。

天上ならぬ我が家の天井でも鼠がクリスマススを祝うとは。鼠にも智恵が付いてきたものか。鼠は元日には嫁が君になる。

星々のひかり打ち合ふ霜夜かな 遠藤 靖子

秋田の霜夜は星一つ一つが燦然とかがやく。大都会の霜夜とは大気の純度が違う。ひかりとひかりが打ち合う。音が聞こえるのでは。見事な把握だ。間もなく雪が来て音は消える。

落花生ぼつちおとぎの国めきぬ 中村 博子

「稲ぼっち」がある。稲架あるいは稲城。落花生を抱き合わせ、稲ぼっちさながら干してある。ぼっち積み。落花生畑に並ぶ円塊状のぼっち。頭に藁帽子を被って。トルコのカッパドキアの首状の石塊にも驚いたが、落花生畑もおとぎの国だ。千葉風景である。コッcottと熱心な作者。

冬の川轟橋を過ぎてより 長尾裕美子

「ごころきばし」では詩情がない。俳句の面白さはことばが発する音声のひびき。「轟橋」を「がらがらばし」とは、流れが川石までがらがら流す、そこに架かった橋。物語誕生。開戦日琉球人は武器を持たぬ民 渡嘉敷皓駄

青雲集

日は西に渡舟に日の届きたる 上石 哲男

の歌姫は「愛の讃歌」を歌い、フランスのペール・ラシエール墓地に眠る。桃色のチューリップがそと墓に。演劇人の作者のピアフへのオマージュである。大竹しのぶのピアフ役の劇評をちらっと眼にしたくらいに私には深い理解が出来ないが、俳句は単純。案外、核心は押えられているのではないか。

人間も冬眠せよとロシアの熊 栗原利代子

プーチンへのアレゴリー(寓意)であろう。ロシアの熊はなかなかお利口である。冬眠が長いものか。睡眠は気持をマイルドにする。人殺しの馬鹿馬鹿しさに気付くものだ。

跳ね回る至福の馬や今年蕪 雄長万寿美

新年を迎えるために今年蕪を馬小屋に敷いて貰ったものか。飼主の愛情を素直に感知する純朴な馬に感動する。

金木犀猫が月から降りて来る 廣瀬 西山

朔太郎の詩片でも目にしたような俳句的詩情を直感した。ファンタジーがある。高い屋根からの猫の跳躍を瞥見したのであっても「月から降りる」の表現が勝負である。面白い。

ふり返り椅子に妻なき暮雪かな 許勢 元貞

決まってその椅子に座っていた妻。当たり前前に。どこへ行ってしまったものか。生前には思っても見なかった妻がない現実に出くわす。暮雪がしんしんと身に沁みる。思惟が深い純愛の作。妻の逝去を偲び、子供さんに背を押されて句集をまとめるという。なにかを動かした方がいい。

天井の鼠も走るクリスマス 松澤 勝彦

冬の日には南の地平線から低い日が射す。紙を漉く手元の舟に届く。日は短い。一日、渡舟を操る単純作業に暮れる。日暮れの日が魂のようだ。胸を打つ地味な句である。

黄落や浅間の裾廻海のやう 宮城 昭代

浅間山は長い裾を曳く。落葉松黄葉が山裾一帯を染める。「海のやう」の比喩が晩秋の浅間山を押し上げている。巧い。佐久平あたりの遠望か。追分原からの迫った実感か。

深く沈みゆく極月のレイエム 松井 弓

十二月を極月という。そこに最後の月への鎮魂がある。その上に深甚からの悼みごとがあったものか。全体にパツクとして十八音がじーんと胸にひびく。

岳集・青雲集から推薦候補作をあげる。

鶏頭の磔刑のごと果てにけり	高木 忠雄
聞えざるムンクの叫び虎落笛	小谷 一夫
田鯉上げ空を遠くにしたるかな	丸山 宏子
どの家も灯ともす頃や粉焼く香	窪田 英治
蒲団叩く墓園隈なく日の盈つる	満田 光生
神楽鬼カメルーンの子抱き上ぐる	垣内 みか
裸木に夕日の深く入りゆけり	山本 正子
晩年はすべてしんじつ除夜の鐘	田中 利政
ゆつたりと野猿湯に入る冬至かな	小林 茂昭
遺されし豆炭の量友の逝き	若林 桂子
角刈りの馬の鬣小六月	栗塚 佳子
初雪はちらし配りの人に降る	遠藤 洋子